がっこうぐらし!another。

木組みの街の市長(多忙中)

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

青年、紫ノ宮隼人はある日を境に命懸けの戦いに身を投じる事となる、

これは絶望に満ちた世界で愛する者や大切な仲間を守り抜いた青年の話である。

この小説には一部分岐点があり、それぞれバッドエンド、正規ルートに別れています

「ご注文はどういたしますか？」のネタが思いつかいないので予備に考えておいた

がっこうぐらしの方の小説を繋ぎとして投稿しておきます

目次

一時限目　混沌の始まり ―― 1
ＢＡＤＥＮＤⅠ ―― 3
二時限目　一時の休息、そして、学園生活部の始まり ―― 5
キャラクター紹介（挿絵あり） ―― 8
三時限目　【幻覚と真実】 ―― 11
ＢＡＤＥＮＤⅡ，Ⅲ ―― 13

一時限目　混沌の始まり

５月２３日、その日は、この日誌を書き始めた日であり、
あの絶望の日々の始まりでもある日であった。
～がっこうぐらし！ａｎｏｔｈｅｒ～

「っと、危ない危ない、今日は園芸部の手伝いあるんだった、悪い和久、先行っててくれ。」
「はいはーい、了解ー。」「んじゃ、俺も手伝い行くか～。」
俺と一緒に居るこのオタクの名前は川田　浩介、同じ道場に通っている同級生だ、
んで、さっき別れたチャラい口調の奴の名前が津月　和久（つづきかずひさ）、
こっちも俺と同じ道場に通っている同級生であり、
幼馴染みでもあるなかなかくえない奴だ。
「て言うか隼人お前、野球部に助っ人頼まれてなかったのか？」
「当然ながら断った、俺は悠里の手伝いしかする気はない！」
「へーへー、相変わらずお熱いことで。」
そんなこんなで屋上に到着。
「おーい悠里～、手伝いに来たぞ～、って何で胡桃と由紀がここに居るんだよ。」
「あ、隼人君」「あ、先輩どうも。」そこにはいつもの園芸部があった、
ただ、二人の邪魔者を除けばだが」
「誰が邪魔者だって？私がいて何か不都合でもあんのか？」
「ん？声に出てたか？て言うか、部活行けよ。」
「今日は二年生は休みなんだよ～だ。」
「ちっ、というか前から言ってっけどここ関係者以外立ち入り禁止だぞ？」
「あーあ、慈先生に見つかったら怒られるだろーなー。」
「あっ！はーくんにこーくん！」「よー由紀ー。」
「ずいぶんと扱いが違うな。」「そうか？」
そう話していたその時、ガチャッ「「！」」

「もう、やっぱりここに居た！恵比寿沢さんに丈槍さんも！
ここは立ち入り禁止だって前にも話したでしょう？」
「ほーら噂をすれば。」「もう、そこも茶化さないの！」
「へーい」そんなことを話していると、グラウンドの方から騒がしい声が聞こえてきた。
「何だ？」俺がグラウンドの方を見ようとしたその時。バンッ！ドサッ。
「ぐっ、うぅ・・・」「先輩!?何があったんですか!?」
屋上に倒れ込んできたのは、陸上部の胡桃の先輩だった。
「やっぱりただ事じゃあ無いみたいだな、浩介！倉庫に入ってる木刀貸せ！」
「おう！」そう言うと浩介は倉庫から木刀を取りだし、こちらになげてきた
「先輩！しっかりしてください！先輩！」胡桃が錯乱しているがこちらも構う余裕はない、
俺は屋上から校内の入り口を覗くと、そこには信じられない光景が広がっていた。
そこには、昇降口に群がるゾンビの群れが居たのだ。
「ーーーッ!!!!」俺はすぐさまに屋上の扉を閉めると鍵を閉めた。
直後、唸り声と共に扉を引っ掻く音や叩く音が聞こえてきた、
このままでは破られるのも時間の問題だ。
由紀達がが怯えている、どうやらゾンビの群れを見たようだ。
「皆！扉を押さえつけろ！少しでも時間を稼ぐんー・・・」
ガシャァァァン！「なっ!?」しまった、ガラスを破られてしまった。
これでは扉を押さえつけても意味は無い、こうなったら。
「浩介、ここは頼んだぞ。」「おい、隼人？何をー・・」
「俺が扉を開けると同時に突っ込む、俺が入ったら鍵を閉めるんだ、良いな？」
選択肢
1、木刀を浩介に渡す。
2、そのまま突っ込む。

BADENDI

1、木刀を託す、を選択した場合の時系列。

「俺が入ったら鍵を閉めるんだ、良いな？」

「そんなことできるわけ無いだろ！」

「じゃあこのまま全員死んで終わるって言うのかよ！」

「ーーーっ……。」「この木刀をお前に渡しておく、俺がやられたとき、いざとなったらお前がそれで皆を守るんだ、良いな？」

「……　わかった。」「悠里、すぐに終わらせてくるから待っててくれ。」

「：　え？」そう一言言うと俺は立ち上がり、ドアの真横に立つと、そっと扉の鍵を開け、

人一人分の隙間を開けて、ゾンビを蹴り飛ばした後、中に飛び込んだ。

カチャリ、と言う声が聞こえる、どうやらちゃんと鍵を掛けたみたいだな。

「さぁ、蹂躙の開始だ。」

一方その頃、浩介視点、

「いやぁ！お願い！離して！中に隼人君が！お願い！離してぇぇぇ！」

慈先生が押さえてくれているが…　隼人、死ぬなよ。

「！胡桃！危ない！」「浩介何いってんだ、この人は…　うわっ！」

クッ、間に合わな…

「あ……」その時、胡桃の指先が、スコップに当たった。

「うわぁぁぁぁぁっ！」

ザクッ！という音がしたと同時に、胡桃の顔に返り血が浴びせられた。

そして……

十分位経ったのだろうか、扉を叩く音は聞こえなくなり、

りーさんも落ち着きを取り戻してはいた、

だが、隼人の安全が確かめられない以上、まだ不安は残っているよ

うだった
隼人とりーさんは恋人であり、さっき別れた時に叫んでいたのは分かるが、
隼人自身、きっと大丈夫だという確信があったのだろう、
そう・・・ 信じたい。
俺は鍵を開けると、そっと扉を開け、中を確認する、
中には、奴等は居なかったが、変わりに奴等の死骸が残っていた。
俺は皆を呼び、下へ向かうと、そこには階段の踊り場で
血塗れになって、壁にもたれ掛かる隼人の姿がそこにはあった。
腕と足がそれぞれ1本ずつ無い。
「いやあああああぁぁぁ!!!」りーさんが悲鳴を上げる
「こ・・・ こう・・ すけ・・・ か?」「隼人!しっかりしろ!今、手当てを・・・」
「もう、いいんだ、俺はもうすぐ死ぬ、自分自身の体だ、
俺が一番分かるんだ、どっちにしろ、奴等に噛まれたせいで、
感染しちまったみてぇだしな・・・・」
「馬鹿野郎!なにいってんだ!お前は死なないんじゃ無かったのかよ・・・ !」
「最後に・・・・ 頼みがある・・・・ 俺を・・ 殺せ・・・・。」「・・・・ え?」
「このまま死んだら、お前達のこと、おそっちまうからな・・・ 俺の首を・・・ 潰せ。」
「・・・・・ 分かった。」
俺は木刀を隼人に向けるとそれを隼人の首に突き刺した。
「うわあああああぁぁぁぁっ!!!!!!!!!!」
ザクッ!!!!!!
畜生・・・ ちくしょおおおおおおおぉぉぉっ!!!!!!

B A D E N D
主人公死亡

二時限目　一時の休息、そして、学園生活部の始まり

「俺が入ったら鍵を閉めるんだ、良いな？」
「そんな事できるわけ無いだろ！」「じゃあこのまま全員死ぬっていうかのかよ！」
「っ・・・・・！」「俺が入ったら鍵を閉めろ、良いな。」「・・・　分かった。」
「悠里、すぐに終わらせてくるから待っててくれ。」
「・・・　え？」そう一言言うと俺は立ち上がり、ドアの真横に立つと、そっと扉の鍵を開け、
人一人分の隙間を開けて、ゾンビを蹴り飛ばした後、中に飛び込んだ。
後ろからカチャリ、と言う音が聞こえる、どうやらちゃんと鍵を、掛けたみたいだな。
「さぁ、蹂躙の開始だ。」
一方その頃、浩介視点。
「いやぁ！お願い！離して！中に隼人君が!!お願い！離してええええ!!」
慈先生がりーさんを押さえてくれているが・・・　絶対に死ぬんじゃねぇぞ、隼人。
「！　胡桃！危ない！」「何いってんだ浩介、この人は・・・　うわっ！」
クッ、間に合わな・・・
「あ・・・・・」その時、胡桃の指先が、スコップに当たった。「うわああああぁぁぁぁっ！」
ザクッ!!という音と共に胡桃の顔に返り血が浴びせられた。
しばらくして・・・
十分位経ったのだろうか、扉を叩く音は聞こえなくなり、
慈先生のおかげなのかりーさんも落ち着きを取り戻してはいた、
だが、隼人の安否が確かめられない以上不安は抱いているようだった。
まぁ、その気持ちもわからなくは無い、
りーさんと隼人は恋人であり、自分の彼氏がしんだとなれば・・・

きっとりーさんは正気を保てなくなるだろう
その時、コンコン。というノック音が聞こえて来た。
その瞬間、ドアを開けたのは他の誰でもないりーさんだった。
ドアを開けるとそこにいたのは、服に返り血を浴びた隼人だった。
りーさんが隼人の胸に飛びつく。
「よかった・・・ 本当によかった・・・・！」「ただいま、悠里。」
そして・・・・
「結局、残ったのは和久をあわせて８人か、」「待て、何で和久の無事が分かるんだ？」
「理由はこれだよ」そう言うと浩介は、一つのトランシーバーを取り出した。
「このトランシーバーはあいつが改造して半径１０ｋｍ以内なら連絡可能なんだ。」
「じゃあ救助を・・ ！」「めぐねぇがそう考えるのも分かる、でも、応答はなかった。」
その時、
ザザッ、ザーーーー・・・・『もしもーし、聞こえるか？』「その声、和久！」
『よかった、そっちも無事か、』「ああ、そっちの状況は？」
『俺は道場に行ってから真刀６本持ってるからやられる心配はない。』
「じゃあ俺の刀も・・・」
『ああ、勿論だ、あと、途中でりーさんの妹のるーちゃんを見つけたから、
合流しておいた。』「分かった、学校で落ち合おう。」
そして・・・
「ねぇみんな、提案があるんだけど・・・・・・」

・・・

「学園生活部？」「そう、この校舎の一番上の階と屋上を使って何とか生き延びるの。」

「なるほど、確かにここなら電気もあるし、いい案だな、」
と、言うわけで「3階の奴等は一掃しておいた。」「す、すごいな。」
「俺と浩介でバリケード作りとあいつらの残骸を掃除しておく。」
「胡桃、行けるか？」「・・・・ ああ。」
そんなこんなで。「よっし、三階の掃除完了！」
「バリケードもできたぞー、ついでに購買部んとこいって食料持ってきた、
生徒会室んとこの冷蔵庫で保存できるだろ。」
そう言うと浩介は段ボールを持ってきた。「でかした、んじゃ、皆ん所行くか。」
ガララッ、「ああ、紫ノ宮君、それに川田くんもって・・・ どうしたのそれ!?」
「今後の食料。」その日の晩
「それ、日誌？」「ああ、もう書き終わったから寝るけどな。」
「そう、・・・ ちょっと見せて貰っても良いかしら？」
「ああ、良いぞ。」「じゃあ、少し読ませて貰うわね。」
「今日は、本当に大変な日だった、パンデミックと呼ばれる物が発生し、
奴等が屋上迄来た時は、本当に終わったかとおもいもしたが、
悠里の為だ、死ぬわけにはいかない。」
「～～～っ。／／／／／／」フルフル「どうした？なんか変な事でもかいてたか？」
「もう！何でこんなこと平気で書けるのよ・・・ はぁ。」
「んじゃ、俺は寝るから、おやすみ、」「あっ、ちょっと待って。」
そう言うと悠里は俺の布団に入り込んできた。
「なっ!?」「不安なの、お願い、今日だけでも良いからこうさせて・・・・。」
「・・・・ ああ。」

キャラクター紹介（挿絵あり）

主人公
紫ノ宮　隼人（１８）
園芸部（仮）帰宅部、
剣術がとても上手く、
助っ人として一度出た剣道大会で優勝した、剣術の道場に通っている
今回のパンデミックでは園芸部の手伝いで屋上に居たため巻き込まれなかった
ＢＡＤＥＮＤ１では、木刀の代わりになる武器が見つからず、
力及ばず破れた。
ちなみにりーさんの彼氏である（中学時代からの付き合い）
オリジナルキャラクター
津月　和久（１８）
（つづきかずひさ）
隼人の同級生であり、幼馴染み、こちらも隼人と同じ道場に通っており、
隼人と互角レベルの強さ。
幼い頃から機械ばかりいじくっていたので、
時々とんでもない魔改造をする事がある、
今回のトランシーバーもその内の一つ。
ちなみに金髪は本人曰く地毛。
他の生徒から不良だと思われがち。
「隼人＆和久」

川田　浩介（１８）
（かわだこうすけ）
隼人の同級生、同じ道場に通っている、
隼人程ではないがそこそこ強い、

パンデミックで恋人を亡くし、無意識の内に
トラウマとして捉えるようになる。
あと、オタク
天崎　由美（１８）
《あまさき　ゆみ》
浩介の彼女、巡ヶ丘学院高等学校三年、
今回のパンデミックにより感染する、
浩介自身は由美を助けられたはずだという
自責の念に追われ、無意識の内にトラウマとして
捉えるようになる。
「浩介＆由美」

■■■■■■■■■■■■■■■■■■

タッタッタッタッタッタッ、「クソッ、何でこんなことに……」
「ヴォオオオオ、」「邪魔だっ!!」ズパッ、ブシュゥッ！
「きゃっ！」「しっかり掴まってろ！」
　時は遡り
　鞣河小学校前にて
「ん？そういえばここってりーさんの妹が通ってる小学校だっけ。」
　パリーン！『キャアアアアアア!!!!』「!?、なんだ!?」
　てなわけで小学校の校舎内に入ると、
『ヴヴァアアアアア』「一体なんなんだよ、この化けもんどもは！」
「だ、誰か助けてぇぇぇぇ！」「！」ありゃりーさんの妹のるーちゃん
！
「うおおおおおおおおお!!!!」手に持っていた傘で
　すれ違い様に頭を潰したあと、一閃でるーちゃんの周りの奴等を吹
き飛ばす
「大丈夫？」「あ、あなたは…」「君のお姉さんのりーさんの友達の津

月和久、
よろしく、さ、お姉ちゃんの所に行こうか、背中に乗りな。」
「は、はい」俺はるーちゃんを背負うと、小学校から抜け出し、道場へとむかった
そして、
「よし、これとこれと、・・・ あと、これとこれだな、
ん？こりゃ隼人の刀・・・ ついでに持っていくか、あ、そうそう、確かここに・・・ あった！」
そういって和久が取り出したのはトランシーバーだった
「これで助けを・・・ クソッ、駄目か、」「和久さん！」「どうした？」「外が・・・ ！」
外に出るとそこに広がっていたのは。
『ヴァァァァァァァァ』「おいおい、まじかよ・・・・」
まさか俺達を追って？まさかそんな、だが、今は、・・・
「るーちゃん、防犯ブザーある？」「は、はい」
さっきの戦闘でこいつらは物音と光に敏感だってことが分かったからな・・・
俺は防犯ブザーのピンを抜くと、窓の外に投げた
ピーーッピーーーッ！ピーーッピーーーッ！
『ヴォオオオオォォォ・・・』ひた、・・・ ひた・・・
「よし、これで、るーちゃん、しっかりつかまっててよ！」
そして今に至る
「見えた！巡ヶ丘学院高校だ！」

三時限目　【幻覚と真実】

紫ノ宮隼人視点

翌朝、五月二十五日、午前八時三十分

「んぁ・・・朝か・・・」

悠里は・・・いない、起こしてくれても良かったのに、

て言うか俺由紀より起きんの遅かったのかよ。

俺は起き上がると制服に着替え、布団を畳んだ後部屋から出る。

ガララッ、「すまん、寝坊した・・・」

「遅いぞ隼人、って由紀は？」「んぁ？いないのか？」

軽めの朝食代わりにカンパンをむさぼりながら胡桃共々首をかしげていると、

ガチャッ！

「紫ノ宮君、恵飛須沢さん！」「なんかあったんですか？」

「いいから二人共ちょっと来て！」

慈先生について行くと一つの教室の前に辿り着いた。

「ここがどうかしたんですか？」「しっ！静かに・・・」

慈先生がそっと扉を開けるとそこには。

『もー、貴依ちゃんってばすぐにそんなこと言うー』

「……ッ!?」「うそだろ・・・？」

そこにあったのはいるはずのない誰かと楽しそうに話している由紀の姿だった。

「まさか・・狂ったって言うのか？」だが、慈先生は首を振る。

「わからないけど・・・きっと昨日の事でで大切な友達も亡くしたみたいだし、

あの子なりに立ち直ろうとしたんだと思う」

「じゃあ、由紀には、幻覚が見えてるってことですか？」

「きっと、そういうことだと思う。」

「…なんでこんな事になっちまったんだよ、クソッ!!」

「・・・・」

そして。

生徒会室・・・もとい、学園生活部部室にて。
「これからどうする？」「そうね、助けも呼べなかったし・・・」
「なら、とりあえずここに向かってるって言う和久君と合流しましょう、
話はそれからね。」
「成る程、慈先生の言う事も一理ある、それじゃあ連絡をしないとな。」
「そういえばトランシーバーどこやった？」
「俺は知らん、ていうか、隼人が持ってたんじゃないのか？」
「私もしらないけど、あと、浩介に同じく」
「私も知らないわね、あと、浩介君と同じ意見。」
「私もー・・・、あ、私も川田君と同じ意見よ。」
「え、俺持ってないけど。」
「「「「・・・・・あれ？」」」」
トランシーバー持ってる人物、由紀。
そんなこんなで

～［津月　和久］視点～
「もうちょっとで巡ケ丘学院高校か・・・」
ん？あれは・・・「!!」
クソッ、なんであいつらがこんなところにいるんだよ！
しかも一体ならまだしも結構いるな・・・・
どうする、俺、とりあえず落ち着け、俺・・・・
よし、考えろ、考えるんだ・・・・
【選択肢、其の弐】
1、隠れてやり過ごす。
2、一気に駆け抜ける。
3、防犯ブザーをつかって別の場所に遠ざける。

ＢＡＤＥＮＤⅡ，Ⅲ

１の〈隠れてやり過ごす〉を選んだ場合の時系列

辺りを警戒しながら、
俺は物陰に隠れると、様子を伺おうとした、その時、
ザッ、ザザーーー、『もしもーし、かずくーん？』
トランシーバーから由紀の大声が聞こえてきた。
「なっ・・!?」何だってこんな時に！
「ヴォオオオォ・・・？」ちっ、気づかれたか、ひとまず逃げないと！
「逃げるぞ！」…こくん、とるーちゃんがうなずく。
「うおらぁぁぁ!!!」
そして・・・・
「なっ!?行き止まり!?」
クソ、早く戻って他の道を・・・
しかし、和久の考えはその直後に打ち砕かれた。
「「「ヴァァァァ・・・・ ヴォオオオオ・・・・」」」」」
「ちっ、袋小路って訳か、」
これだけの数を俺一人で凌ぎ切るのは無理だ、ましてや
るーちゃんもいる、となると・・・
「へッ、万事休す、って訳かよ」
ならば仕方ない、
「るーちゃん、俺が奴らを片付けるのと囮になるから、その間に
るーちゃんは学校に行くんだ、良いな？」
「…うん」「良し、いい子だ、それじゃあな、隼人に宜しく言っといて
くれ。」
「…わかった。」
「さぁて、覚悟は良いか？てめぇら、いい声で啼けよぉっ!!!」
そう叫ぶと俺は、奴らの群れの中に突っ込んでいった。
そして…
「おらぁっ！」ズバッ!!バシャァッ！
「ヴァぁぁッ！」ガッ！

なっ、離せ、この野郎、ガブッ、
「っ痛！」くそっ、噛まれちまった！
頭の中がぐるぐるする、空腹感に襲われ始めてきた、
「くっそ、奴らの仲間入りってかよ！」
仲間入り？ふざけるなよ？このままで終われるかよ、
だったら、、、
「てめぇらをありったけ殺してやろうじゃねぇかよ、オイ。」
感染しきる前に殺せるだけ殺してやる！
「ウォラァァァァ!!!!」
ＢＡＤＥＮＤⅡ、
感染ＥＮＤ
３の防犯ブザーで引き付ける、を選んだ時系列、
俺は今朝にポケットに入れておいた予備の防犯ブザーを取り出すと、
少し後ずさり、栓を引き抜いて遠くへと投げた、
「よし、これで・・・」
走り出そうとしたその時、グンッ、と、後ろに引っ張られる感じがした、
「え・・・？」振り向くとそこには、だらんと脱力しきったるーちゃんの姿と、
その肉を貪る奴の姿があった、力が抜け切ったるーちゃんが地面に落ちる。
「・・・・まら、貴様らぁっ！」
俺は完全に冷静さを失い、奴らに斬りかかった、
たとえ、傷を受けようが、刀がすべて折れようが、
生ある限り殺し続けた、殺してやる、コロシテヤル！
そして、死ぬ間際に浮かんでいた俺の表情は・・・・
笑っていたという・・・
ＢＡＤＥＮＤⅢ
発狂ＥＮＤ。